

第1回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

日 時 平成31年1月30日（水） 18:00～20:10

会 場 市役所本庁舎2階 第1委員会室

出席者 石垣のりこ委員、植田今日子委員、遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、野家啓一委員、マリ・エリザベス委員、本江正茂委員

- 議 事
- 1 開会
 - 2 あいさつ
 - 3 委員紹介
 - 4 委員長及び副委員長選出
 - 5 議 事
 - (1) 委員会の運営について
 - (2) 委員会の役割等について
 - (3) 震災復興メモリアルに関するこれまでの取組状況等について
 - (4) その他
 - 6 閉 会

配布資料	資料1	中心部震災メモリアル拠点検討委員会委員名簿
	資料2	中心部震災メモリアル拠点検討委員会設置要綱
	資料3	中心部震災メモリアル拠点検討委員会の運営について（案）
	資料4	中心部震災メモリアル拠点検討委員会の役割等について（案）
	資料5-1	仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書（概要）
	資料5-2	仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書（本編）
	資料6	震災復興メモリアル等事業の取組状況
	資料7	沿岸部施設の運営状況
	資料8	他都市におけるメモリアル施設の状況
	資料9	中心部震災メモリアル拠点に関する仙台市議会質疑（抜粋）
	資料10	沿岸部施設来館者及び市政モニターへのアンケート調査結果

○事務局（高橋室長）

ほんの少し定刻よりも早い時間でございますが、皆さまお揃いでございますので、ただ今から「第1回中心部震災メモリアル拠点検討委員会」を開催させていただきます。私はまちづくり政策局防災環境都市・震災復興室の高橋と申します。本日は議長が決定致しますまでの間、司会進行役を務めさせていただきますので、どうぞよろしくおねがい致します。

はじめに資料の確認させていただきます。お座席に、座席表と本日の次第、資料一覧、資料ナンバーを付しまして資料1～10の資料を置かせて頂いております。資料の不足がございましたらお申し付けください。

本日は併せてお知らせと致しまして、カラーのパンフレットでございますが、荒井駅にありますせんだい3.11メモリアル交流館のパンフレット、震災遺構仙台市立荒浜小学校のパンフレット、3つ目に3.11メモリアル交流館で先週より始まりました企画展「そ

れでも、下水はとめられない」下水道の企画展のパンフレットも併せて付けさせていただいております。

今回、資料 1 記載の皆さまに委員をお引き受けいただきまして、ご多忙のところ本日も出席を賜っております。

皆さまの机上に、本委員会委員の委嘱状を置かせていただいております。本委嘱状をもちまして委員の皆さまへの委嘱に変えさせていただきたいと存じますので、ご了承のほど、お願い申し上げます。

次に、資料 2 をご覧ください。本委員会の設置、運営に関する事項を定めた「要綱」でございます。

要綱は、皆さまにあらかじめ送付させていただいておりますが、本委員会の検討事項、委員長及び副委員長の選任、会議の成立要件等を定めたものでございます。

会議の成立に関しまして、本日は、10 名の委員全ての皆さまにご出席いただいておりますことから、要綱第 5 条第 2 項による定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

また、会議の公開・非公開の取扱いにつきましては、後ほど議事の中でご審議いただく予定でございますが、本市では、原則公開とすることとしておりますことから、正式な決定を行うまでの間、公開という形で進めたいと考えておりますので、ご了承のほど、お願い申し上げます。

それでは、開会にあたりまして、仙台市まちづくり政策局長の福田よりごあいさつを申し上げます。

○福田局長

仙台市まちづくり政策局長の福田と申します。どうぞよろしくお願い致します。会議の開催にあたりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

皆さま方におかれましては日頃より市政各般にわたりご協力を賜っておりますこと、改めて感謝申し上げます。また、このたびは大変お忙しいなか、検討委員会の委員をお引き受けいただき、また今日は大変寒い中ご出席を賜り、重ねて感謝を申し上げます。

本市では平成 26 年 12 月に仙台市震災復興メモリアル等検討委員会から提言をいただき、そのなかで、東日本大震災の記憶と経験を、未来へ世界へつないでいくため、拠点整備につきましては、沿岸部と中心部の二つの拠点での展開が有効であるというような提言をいただいたところでございます。これを踏まえまして、沿岸部におきまして、平成 27 年度にはせんだい 3.11 メモリアル交流館を、平成 29 年度には震災遺構仙台市立荒浜小学校を開設するなど、段階的にメモリアル施設の整備を進めてきたところでございます。

震災から間もなく 8 年が経過しようとしておりまして、記憶の風化というものが心配されるなか、このたび、中心部の拠点について、検討を進めるということにしたものでございますが、検討を進めるにあたりまして、さまざまな知見をお持ちの皆さま方のご意見を頂戴致したく、本委員会を設置するものでございます。

第 1 回目の本日は、本市の沿岸部施設のほか、他市町にも整備されつつあります施設、民間を含めた伝承の取り組み、さらに国内外のさまざまな事例や、市議会での議論などについてご説明をさせていただきますけれども、今後沿岸部ではない中心部の拠点であること、被災地の中の仙台という拠点性、市民の関わり方なども含めまして、中心部拠

点のコンセプトや、持つべき機能などにつきまして、さまざまなお立場で震災の記録や発信、研究などに携わってこられた専門の皆さま方にご議論いただき、ご意見を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

○事務局（高橋室長）

続きまして、委員の皆さまをご紹介させていただきます。私からお名前を申し上げますので、委員の皆さまにおかれましては、大変恐縮ではございますが、その場にご着席のまま、お一人につき1分程度で、簡単に自己紹介をお願い致します。

それでは資料1の名簿順ということで、初めに、石垣のりこ委員からお願い致します。

○石垣委員

エフエム仙台の石垣のりこと申します、本日はどうぞよろしくお願い致します。

私は現在ラジオ制作、出演も含めて担当しております、現在は Date fm エフエム仙台の午後の生ワイド番組 J-SIDE STATION を中心に、東日本大震災の復興応援プロジェクト Hope for MIYAGI というのを弊社で展開しております、そちらのフラッグシップの番組 Hope for MIYAGI を担当しております。普段からリスナーの皆さまと、身近なテーマでおしゃべりをしながら番組を進めていき、また、震災復興関連の番組では被災された方、また支援に携わる皆さまのお話を伺って皆さまにお届けしておりますので、この場ではより一般の皆さまに近い立場から、考えていけるのかなと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

○植田委員

初めまして、上智大学の総合人間科学部社会学科で准教授をしております、植田今日子と申します。

私は2010年度から6年間、仙台にある東北学院大学に勤めておりました。その時、唐桑半島であるとか、仙台市で震災の伝承というものをどういう風に民間のみなさんが取り組んでこられたかというような、メモリアル交流館の企画展示にも参加させていただいたこともございます。都市の災害の伝承ということにも色々と携わったというか、みなさんのお声を聞いたことがあるんですけども、そういう災害文化というものを深く考えるような機会になれば良いなと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

○遠藤委員

地域社会デザイン・ラボの遠藤智栄と申します。よろしくお願い致します。

私は普段、まちづくりの支援ですとか、人材育成の支援、市民による政策提言の支援、政策や市役所の事業への市民参加の支援などの活動もさせていただいております。

あとは、震災以後は被災したコミュニティの再建ですとか、そういったことを住民の皆さんやそのテーマを何とかしたいという皆さんの応援をさせていただいております、そういった点では岩手、宮城、福島のコミュニティやいろいろな復興支援の団体のサポートもさせていただいております。

今回はまさに先ほど局長がおっしゃられたように、私も東北の中の仙台ということも意識しながらいろいろ考えていきたいなと思っておりますので、よろしくお願い致します。

○大泉委員

皆さん、おぼんでございます。河北新報の大泉と申します。

今は防災教育室というセクションと、それから営業部というところと兼務をしております。平成7年、1995年に入社をして、ずっと記者職として仕事をしてきましたけれども、去年の4月から営業部を兼務しております。

東日本大震災の以前はこの地域の懸案であった宮城県沖地震に備えるための防災啓発の紙面づくりにも携わって来ましたし、発災後は閑上だったり南三陸町などの被災地取材も経験しました。その後は被災地と若者をつなぐインターンの取り組みでしたり、または震災伝承を担う次世代の育成の取り組みだったりを会社としてやっております。

日々、今震災報道に携わっている記者はうちの会社にもたくさんいるわけですがけれども、当然彼らは日々紙面づくりにいっぱいなものですから、ちょっと私は今最前線からは離れていますけれども、今までたくさんの方に取材でもお世話になりましたし、たくさんのお語り部の方にもご協力いただいてきたので、そういった人たちの言葉だったり胸中も察しながら、どういった施設が最適なのかということに少しでもお役に立てればと思います。よろしく願いいたします。

○佐藤（翔）委員

こんばんは。東北大学災害科学国際研究所の佐藤翔輔と申します。研究としての専門が災害の記録とか、あと、先ほど植田先生もおっしゃっていましたがけれども、災害のことを伝えるという伝承のことを専門とさせていただいております。

県内ですと気仙沼、石巻、塩釜、名取等でこういった遺構とか施設のアドバイザーを担当させていただいていまして、そういう意味で競合他社と言うと恐縮なんですけれども、競合他社の状況にも、精通はしているかどうかあれですけれども、存じ上げていますので、そういった差別化みたいなところについても言及できればなというふうに思っております。

あと、中越地震で自身が被災したということもありまして、その伝承事業にも共同調査等でお手伝いしていますので、そういった外の知識についてもご提供できればと思います。

今日資料10で来館者のモニター調査とか来館者さんの調査を今回お手伝いさせていただきましたので、それについても詳しくご紹介できればというふうに思っております。

このたびはどうぞよろしくお願いいたします。

○佐藤（泰）委員

せんだいメディアテーク元副館長の佐藤泰と申します。私だけ元というのが付いたままですけれども。

私は仙台市博物館に18年間学芸員としておりまして、その後にメディアテークの建設計画に関わり、コンペの立ち上げから建設あるいは運営計画、そのでき上がった後の実際の運営にずっと関わってきた人間です。

そういう意味で、学芸員ということであるとかミュージアムであるということとか、あるいはメディアテークみたいな施設についてどう企画を進めて、それを実現し、さらにそれをより良い形でどう活動していくのかといったようなことについて向き合ってきた

て、うまくいっている部分もいかない部分もある意味いろいろな経験をしてきたと思っています。そうした経験を多分生かして、今回のプロジェクトに何らかの形にお役に立てればいいのかと思っています。

施設をつくるということが大事なんですけれども、とにかくその中で何をやるかというのが何よりも一番大事なので、その議論がより深まるように進んでいけばいいなというふうに願っております。よろしくお願いいたします。

○志賀委員

初めまして、志賀理江子と申します。

私はもともと愛知県岡崎市の生まれなんですけれども、2006年の仙台メディアテークの「Re:search (リサーチ)」というアートの展覧会で初めて宮城県に来まして、その後写真をたくさん撮って展示をしたんですが、写真を撮るだけでは全然わからないぐらい仙台とか宮城、東北の魅力にものすごく惹かれまして、2008年に移住してきました。

2008年から名取市の北釜という小さな集落なんですけれども、そこに移住をしまして村の専属カメラマンみたいな形で、生活をしながら作品を撮って、村の記録も撮るということもさせてもらっていました。

その中で震災をじかに経験しまして、そのまま3カ月避難所で、約3年間仮設住宅で暮らさせてもらいました。その中で、メディアテークで2012年の終わりから13年に「螺旋海岸」という作品を発表させていただいて、その中で震災というものが大きなターニングポイントになったんですけれども、もともと写真は記憶に関係する仕事ですので、今回のメモリアルというのが、一体残された人間に対してどういう意味を持って、それがどういうふうに関係していかっていくのかということをしっかり考えて向き合わせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○野家委員

東北大学で教員をしております野家と申します。ちょっとのどを痛めておりますのでお聞き苦しい点、ご容赦ください。

私の専門は哲学なんですけど、もともと私は理科系の人間で、東北大学の理学部の物理学科を卒業してから大学院で哲学に変わったような経歴ですので、文理融合みたいな分野を専門にしております。

もう文学部の哲学科の方は6年前に定年になっておりますが、現在はそこに、自分でも覚えられないんですが、高度教養教育・学生支援機構というところに属して、主に新入生というか、1年生の授業を担当しております。

私は生まれも育ちも仙台で、もう来月古希を迎えますので、多分皆様方が生まれる前の仙台を知っているという意味では多少このメモリアルの建設ということでもお役に立てる面があるかと思っておりますけれども、これまで何回か本江先生なんかと一緒にいろいろディスカッションする機会がありましたので、そういうことを踏まえながら、風化と忘却ということが言われておりますけれども、それに対抗するような何かお知恵を皆さんから拝借して議論をしていきたいなと思っています。よろしくお願いいたします。

○マリ委員

皆さん、こんばんは。初めまして。マリ・エリザベスと申します。マリが名字なんで

す。私はアメリカ出身で、ちょっとまだ粗末な日本語で申しわけないです。

私は今東北大学災害科学国際研究所に勤めて5年目になります。その前は神戸にある人と防災未来センターという地震の博物館の研究者も経験もあって、メインの研究が住宅復興という災害後の住民の生活がどういうふうに変化するということがメインの研究なんですけれども、その伝承とみんな住民の経験をどういうふうに記録する、伝えるということも興味深くて、日本国内と海外のどういう事例があるかとちょっと研究もしたことがありますので、もう仙台に拠点として海外の目と海外の学術的な人も一般的にどういうふうに関心、国内外という発信できるかという、頑張りたいと思います。よろしくをお願いします。

○本江委員

こんばんは、本江と申します。

私は東北大学の教員で、専門は建築の設計でございます。もう少し突っ込んで言うと、中にいる人がそれぞれの力を発揮できるコミュニケーションの場所をつくるということで、具体的にはオフィスとか、あるいはワークショップをやるような教室とか、あるいは展示の空間で情報共有するためのスペースとか、そうしたものを上手につくれるようになりたいというふうに思っています。そうしたことをやっているということもあります。大もとの仙台市の震災復興メモリアル等検討委員会でも委員にさせていただいて、いろいろお話をしてきました。

それから、その縁もあって今の荒井駅の3.11メモリアル交流館の、具体的な設計を担当させていただいて、建物は既にあつたんですけれども、それをどういうふうに使おうかなどの、より具体的なつくり込みのところのデザインも担当させていただきました。

なので、おそらく仙台市のメモリアル事業ということについてはそれなりにコミットをしてまいりましたので、責任もあるし、それをうまくさらにつないで意味のある活動につなげていきたいというふうに思っております。

この委員会の責任は非常に大きいと思いますので、なんとかその中でお役に立てればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（高橋室長）

委員の皆様、ありがとうございました。よろしくお願い申し上げます。

次に、委員長及び副委員長の選出をお願いいたします。要綱の第4条にございまして、委員長及び副委員長1名は委員の互選によりこれを定めることとしております。委員長及び副委員長につきまして、どなたかご推薦のある方ございましたらご発言をお願いいたします。

○佐藤（泰）委員

今回のプロジェクトにつきましては、凶らずも私たちの時代が体験した震災の意味とか体験の深さとか、そういったことを深く掘り下げながら、それをどう伝えていくかということを考えることになると思います。その核となる理念をよりの確な言葉で具体化して、それを広く伝えていくということがこの委員会としては非常に重要なことなのかなというふうに思われます。

そのような意味で、この委員会の委員長には哲学者であられ、また教育者としてもそ

ういったことにずっと関わってこられた野家委員にぜひ委員長をお願いしたいと思いません。

またさらに、副委員長には先ほど本人からご説明がありましたように、メモリアル検討委員会の委員としての経歴、それから3.11メモリアル交流館の整備にも携わってこられた本江委員をお願いするのがふさわしいのではないかと思います。

以上、ご提案申し上げます。

○事務局（高橋室長）

ただ今、佐藤泰委員より委員長につきましては野家委員に、副委員長につきましてはメモリアル交流館にも携われました本江委員をお願いしてはどうかというふうなご提案があったところでございますが、委員の皆さま、いかがでございましょうか。

○全員

異議なし。（拍手）

○事務局（高橋室長）

それでは、皆さま異議なしということでございましたので、野家委員に委員長を、本江委員に副委員長をそれぞれお引き受けいただきたいというふうに存じます。

それでは、野家委員には前の委員長席に、また本江委員には副委員長席にそれぞれご移動をお願いいたしたいと思えます。

それでは、先ほど自己紹介などもいただいたところでございますが、ただいま委員長及び副委員長に選出されました野家委員、本江委員より改めましてご挨拶を頂戴いたしたいと思えます。野家委員、よろしくお願ひいたします。

○野家委員長

ただ今、委員長にご推挙いただきました野家でございます。よろしくお願ひ申し上げます。ふつつかながら委員長をお引き受けさせていただきます。

今回委員に参加されている皆様方は、先ほど自己紹介にもありまして、それぞれの分野でエキスパートというか、これまで実績を積み重ねてこられた方、また、震災や復興のプロセスにも何らかの形で関わってこられた方ですので、貴重な意見をたくさんいただいて市民目線でこういうメモリアルの計画をぜひ風化と忘却に抗してコンセプトづくりをしていただければと思えます。よろしくお願ひ申し上げます。

○本江副委員長

僭越ですけれども、副委員長にご推挙いただきましたので頑張ってお務めさせていただきます。

この委員会は恐らく、事務局の方から出てきた資料に淡々とお墨つきを与えるというような会ではなくて、実質の問題として仙台市がメモリアル事業を行っていくそのときに、本当に役立つ形で何をしたらいいのかということを実践的に考える、あるいはプラクティカルに意味のあることをここでアイデアを出し合いながら考えていく場所だと思います。今日は初回でもあり、こういうちょっとフォーマルな感じですが、先ほど申し上げましたように僕はアイデアを出す場所をどうやってつくるかということ

段考えておりました、私たちのミッションにとっては、多分こういう会議を何回かやるだけではだめなので、何かもっと違う形の会議のあり方とか、あるいは我々委員だけでなく市民の皆さんと一緒に考える機会なんかも必要だと思います。そうした場をどういうふうにつくっていくのかというようなこともあわせて考えていければなというふうに思っております。そういうつもりでアイデアを実質的に出していけるような会にしていければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（高橋室長）

ありがとうございました。それではただいまより本日の議事に入りたいと存じます。

これからの進行につきましては野家委員長にお願いいたしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○野家委員長

それでは、委員長として司会進行を務めさせていただきます。

委員長の役目は進行役ということに尽きると思っておりますので、委員の皆さま方はぜひ忌憚のないご意見やご質問や、そういったものを寄せていただければと思います。

それでは、最初に会議を運営していくための必要事項についてお諮りをいたします。

まずは、会議の公開及び非公開について決めなければなりません、事務局から案が提示されておりますので、事務局の方から説明をお願いいたします。

○事務局（庄子課長）

メモリアル事業担当課長の庄子と申します。着席のまま説明させていただきます。

それでは、資料3をご覧ください。資料3、中心部震災メモリアル拠点検討委員会の運営について（案）でございます。

1、会議の公開について。会議の公開・非公開についてですが、仙台市は会議を原則公開としておりますので、公開とさせていただきたいと考えております。

ただし、次の場合に委員長が委員に諮って非公開とすることができますので、その点を説明させていただきます。まず、個人に関する情報で特定の個人を識別し得るものを扱う場合。それから、政策形成過程における情報で、公開することにより事務事業の適正な執行に支障が生じる恐れがある情報を扱う場合。そして、その他非公開とすることに相当の理由がある場合、その場合は非公開と定めた場合、理由を明確にする必要がございます。

では、公開の方法についてです。公開は会議の傍聴を認めることにより行うこととし、その定員などについては、会場の制約などを勘案し、その都度委員長が定めるものといたします。

傍聴者の遵守事項については、公正かつ円滑な会議の運営を確保するため、傍聴に係る遵守事項を裏面のとおり定めます。

なお、本日傍聴の方もたくさんいらっしゃいますので、裏面の方と一緒に確認をさせていただきます。裏面をご覧ください。

会議の傍聴に際し守っていただきたい事項です。会議の円滑な運営を図るため、会場では以下の事項を守ってください。1、会議中は静かに傍聴し、拍手をしたり発言をするなど会議の進行を妨げるような行為をしないこと。2、鉢巻きや腕章の類いをするな

ど、示威的な行為をしないこと。3、飲食または喫煙をしないこと。4、写真撮影、録画、録音等を行わないこと。ただし、会議の同意を得た場合はこの限りではございません。5、他の傍聴人の迷惑になるような行為を行わないこと。6、その他会場の秩序を乱し、または会議を妨害するような行為をしないこと。7、係員から指示があった場合、速やかに従うこと。以上の事項に違反した場合、退場していただく場合がございます。

では、1の(3)に戻ります。遵守事項に違反した方、危険物を所持している方、酒気を帯びている方、その他委員長が会場内の秩序の維持に支障を及ぼす恐れがあると認める方は会議を傍聴することができません。

それから2つ目、議事録の作成についてです。

議事録は事務局である仙台市まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室で作成いたします。

議事録には次の事項を記載します。ア、開会年月日、開会及び閉会時間。イ、出席委員の氏名。ウ、説明のために出席者した市職員の職氏名。エ、議事の経過。オ、その他必要な事項。

(3) 議事録には委員長及び委員長が指名した委員が1名署名いたします。

説明は以上になります。

○野家委員長

ありがとうございました。ただいま事務局から説明をいただきましたが、議事を公開にすること、また非公開にする場合の条件、また傍聴に関する注意事項等、説明がございました。何かこの件に関しましてご質問等ございましたらお願いします。何でも結構です。

○全員

(質問なし)

○野家委員長

よろしいでしょうか。それでは、ただいまご説明がありましたように一応こういう会議は仙台市では公開となっておりますので、事務局案のとおり会議は原則公開としたいと思います。

それから、審議の中で非公開とすべき分、先ほど個人情報に関わる件とか、3つほどでしたでしょうか、ありましたが、そういう場合には委員長が委員会にお諮りして非公開とすることができるということでございますので、その都度皆様にお諮りして決めさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○全員

はい。(異議なし)

○野家委員長

ありがとうございます。それでは、そのようにさせていただきます。

また、議事録につきましても、先ほどご説明がありましたようにアイウエオというこの事項について、最近政府の方では議事録を余りきちんとしないということが慣例にな

っているようですが、仙台市の会議ではきちんとした議事録をつくって今後の幅広い議論に資することにしたいと思えます。

その件についてもよろしいでしょうか。

ありがとうございました。

それで、先ほど議事録の署名には委員長及び委員が指名した委員1名が署名するという規定がございました。そういう名簿順ということで、あいうえお順でいつもトップになって申しわけないんですが、石垣委員にお願いしたいと思えますが、よろしいでしょうか。

○石垣委員

はい、かしこまりました。

○野家委員長

お願いいたします。

それでは、その他この会議の運営に関することで不明なこととか、あるいはこうしたらいいのではないかというふうなご意見とかございましたら、どうぞ遠慮なくご意見を伺いたいと思えますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、何か新たなご提案とかありましたら、その都度挙手の上ご発言ください。

それでは、議事の(2)委員会の役割等についてに入らせていただきます。

それでは、事務局で資料を用意しておられるようですので、それをもとにして説明をお願いいたします。

○事務局(庄子課長)

それでは、本委員会の役割などについて、ご説明いたします。資料4をご覧ください。

資料4、中心部震災メモリアル拠点検討委員会の役割等についての案でございます。

1、役割。中心部震災メモリアル拠点の基本構想策定に向けた検討です。

2の目標です。平成32年度中の中心部震災メモリアル拠点の基本構想策定に向けて、本検討委員会としての提言をまとめる、こちらを目指します。

3、では、その基本構想に関する検討事項です。(1)中心部震災メモリアル拠点のコンセプト及び機能に関すること。(2)中心部震災メモリアル拠点と周辺施設、他のメモリアル施設との連携・機能分担に関すること。(3)その他必要な事項です。

4、会議スケジュール等について。(1)会議は平成32年度までに全7回程度開催する予定です。(2)市民参加型の会議やイベント、パブリックコメントなど、市民意見を広く聞く機会を複数回設けるとともに、同イベントや市ホームページなどを通じて検討状況を周知いたします。

以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。

ただいま本委員会の役割、目標、検討事項、スケジュール等について説明がありました。この件についてご意見あるいはご質問等ございましたらお願いします。

目標のところにある平成32年度中というのは、もう平成から変わっていますね。それ

で、要するに 33 年の 3 月末までということに理解してよろしいでしょうか。わかりました。新しい年号がどうなるか知りませんが、では 32 年度中ということは 33 年の 3 月末日までに提言をまとめるということだそうです。

ほか何か不明な点等ございましたら。よろしいでしょうか。

それでは、次の議事に移らせていただきます。議事の 3 番目ですが、震災復興メモリアルに関するこれまでの取り組み状況についてです。

次に、震災復興メモリアルに関するこれまでの取り組み状況等について事務局の方で資料を用意していただきましたので、それをもとに説明をお願いいたします。

なお、資料が大変多いようですので、質問は資料一式を説明していただいた後にまとめて質問を受け付けるということにしたいと思うんですが、よろしいでしょうか。

それでは、事務局の方から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、震災復興メモリアルに関するこれまでの取り組み状況などについてご説明いたします。委員長にもお話しいただきましたように資料が大変多くなっておりまして、かいつまんで要約という形になるかと思えます。よろしくをお願いいたします。

まずは、本委員会のテーマである中心部震災メモリアル拠点を含め、震災復興メモリアルのさまざまな取り組みについてご提言いただいた震災復興メモリアル等検討委員会の報告書について振り返らせていただきます。

メモリアル等検討委員会の報告書は 5-2 ということで冊子になってございますが、この 5-2 の内容を 5-1 のところにまとめましたので、5-1 のペーパーを使いながら説明させていただきます。

なお、この後続きます資料 6 は、この資料 5-1 の 6 つの取り組みの方向性、こちらに沿って状況を説明させていただくものになります。

それでは、検討委員会の報告書です。

1、震災復興メモリアルに込める願い。これはメモリアルという言葉ではございますが「時を経て世代が替わっても、災害から命を守るために、仙台市民一人ひとりが東日本大震災の記憶と経験を未来へ、世界へつなぐ」ということで、メモリアルという言葉ではございますが、未来へ向かっての提言ということでございます。

2、6 つの取り組みの方向性です。こちらは左側の下の方に 6 本の柱もございますが、「地域資源を引き継ぐ」、「記憶と経験を形にする」、「明日へ向かう力を育てる」という 3 本の大きな柱、その中の取り組み 6 つです。「東部地域におけるみどりの再生」から「知り学ぶ機会をつくる」まで、こちら 6 つの取り組みを定めております。こちらの内容はまた詳しく後ほどご説明いたします。

3 の「拠点整備による事業展開」です。こちらはメモリアル検討委員会の 11 ページのところにある表でございますが、拠点の整備による事業展開ということで、メモリアル検討委員会では中心部、それから沿岸部、その 2 拠点での事業の展開を提言いただいております。この赤色の方の中心部の拠点を今回皆様にご検討いただくわけですが、右側の方、沿岸部の拠点、こちらの荒井地区とありますのが東西線荒井駅の中にあるせんだい 3.11 メモリアル交流館のことでございます。こちらの拠点と、それから左側の津波被害等の中に震災遺構等という言葉もございます。この提言を受けまして、震災遺構荒浜小学校、それから来年度公開予定の荒浜地区の住宅基礎などを整備してきております。

では、中心部の方でございますが、検討対象ということで赤い箱書きになっております。中心部拠点の役割、それから機能、こちらの提言をいただいておりますが、震災からもうすぐ8年、そして提言からも4年たっております。その間に進んできた取り組みもございました。ですので、この赤書きにある役割、機能が今そのままふさわしいかどうかということも含めて、皆さまにはあり方、役割、機能、そういったところをご検討いただきたいと思いますと考えております。

4、「組織設置と協働による事業推進」。これは事業の推進には組織の設置、それから協働が必要だということで提言をいただいております。またこれは資料6の方で詳しく説明させていただきます。

では、資料6の方をご覧ください。

資料6は震災復興メモリアル等検討委員会のご提言をいただいてこれまで取り組みのあった状況についてご説明いたします。

左側にはメモリアル等検討委員会の提言として報告書に記載されております取り組みの方向性ですとか視点、それをそのまま転記しております、右側にはそれに関する事業がこの8年間にどのように進んできたかを例示しております。

なお、この一覧にある事業でございますが、各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を掲載したものでございますので、全てを網羅しているわけではございません。

こういった事業が進んできている中で、右側の一番下にまとめを記載しておりますのでご覧ください。

「東部地域におけるみどりの再生」、それから「貞山運河の再生」、こちらについては本市と市民や関係団体との連携により事業が展開されているほか、防災集団移転跡地の利活用の取り組みも行われております。

また、「地域資源の活用」については、上記に関わるもののほかにも海水浴場の再開に向けた取り組み、それからRE:プロジェクトなど、行政や市民、それらの協働による取り組み、それから新たな事業の企画も含め活発に進められていると認識しております。

それでは、2枚目をご覧ください。

2枚目は2つ目の柱、「記憶と経験を形にする」の中の「モニュメントと遺構による記憶の継承」と「市民力によるアーカイブの整備と利活用」、こちらの事業の展開をまとめたものです。事業は右側にまとめてございますが、左側の一番下にありますまとめのところをご覧ください。

東部沿岸地区におけるモニュメント整備や遺構保存は、整備事業がほぼ終了しております。この遺構保存には荒浜小学校や住宅基礎の遺構の整備もございます。また、本市やさまざまな機関におけるアーカイブの取り組み、それから観光分野の情報発信、情報誌発行、シンポジウムの開催など、さまざまな形で震災の記憶と経験を伝えようとする取り組みが展開されております。

そして、課題でございますが、アーカイブの連携や収集されたさまざまな資料の活用、それから、多くの市民の方が関わる機会の創出、それは本市の中心部拠点の整備も含まれます。そういったものや、既に整備された遺構の継続的な保全や公開のあり方、これは今後の課題であると認識しております。

では、3枚目をご覧ください。

「明日へ向かう力を育てる」という3本目の柱です。「文化・芸術の力を復興と記憶の継承に生かす」、それから、「知り学ぶ機会をつくる」という取り組みの方向性の実績で

ございます。一覧は右側でございますが、まとめとしまして左側の一番下、「文化・芸術の力」についてはさまざまな取り組みや拠点となる音楽ホールの検討が進んでおり、知り学ぶ機会についてもメモリアル交流館の企画展によるフィールドワークの実施、大学・報道機関などと連携した人材育成、追悼関連行事などが行われております。

また、多様な主体の取り組みについて、これらの連携と継続を図り、世代を越えて震災への意識を持ち、深め、学んでいく仕組み・環境を整えていくこと、これが今後の課題であると認識しております。

では、4枚目をお開きください。

資料5-1の右側に書いておりました「拠点整備による事業展開」、それから、「組織設置と協働による事業推進」、こちらのまとめでございます。右側の下の方をご覧ください。

メモリアル交流館、震災遺構荒浜小学校が設置されたほか、メモリアル事業に関わるさまざまな主体による連携体制づくりも行われております。また、市民一人一人の経験のくみ取り、多様な主体の知恵の結集により国内外へ発信するための手法を生み出すこと、核となる組織づくりなどは今後の課題でございます。3、震災メモリアル事業は多くの主体により多様な形で既に実施されております。本市としてもこれらと連携しながら、継続的な事業実施の仕組みをつくっていく、これが今後重要であると認識しております。

次に、本市がこれまで整備しましたせんだい3.11メモリアル交流館及び震災遺構仙台市立荒浜小学校の運営状況についてご説明いたします。資料の7をご覧ください。

資料の7、沿岸部施設の運営状況です。こちら青の線がメモリアル交流館、赤の線が荒浜小学校の来館者の推移でございます。メモリアル交流館は平成27年12月にオープンをいたしております。荒浜小学校は平成29年4月30日に公開を開始しております。公開から3年、1年というところですが、特に来館者は減っているということはなく、むしろ増えて微増傾向にございます。

なお、右上にあります来館者の居住地ですが、これは団体の方など案内を希望された方にとったアンケートでございますので、メモリアル交流館は来館者全体の1割ぐらい、荒浜小学校は来館者全体の3割ぐらいの内容でございますが、メモリアル交流館については53%が市外居住者の方、1割ぐらいが海外居住者の方、荒浜小学校については73%が市外の国内居住者の方、6.7%が海外居住者の方となっております。

次のページです。次のページからは沿岸部の拠点であるメモリアル交流館の企画展の開催状況です。こちらは企画展ということで年3回から4回実施しておりますが、その内容については風土をピックアップしたような展示ですとか、あとワークショップ、市民参加をメインにしたようなものですとか、あとは消防士、それから今実施しております南蒲生浄化センター、そういったところでの職員が実際に震災のときにどのような対応にあたったか、その心の部分に焦点を当てたような企画展示なども行っております。

4ページ以降はその3.11メモリアル交流館で行っております協力事業の状況です。今現在、東部の拠点ということになっておりますメモリアル交流館でこれだけの協力事業が民間も含めて実施されております。数は増えておまして、29年度25件に対して30年度の方は既に12月までで29件となっております、まだ増える予定でございます。

資料7については以上です。

では、資料8をご覧ください。他都市におけるメモリアル施設の状況についてご説明

いたします。1枚目にまとめ、2枚目以降はそれぞれの施設の詳細の状況についてご説明しております。

1枚目をご覧ください。まず、挙げさせていただいた施設の中で特に特徴がある部分を説明させていただきますと、東日本大震災関連と阪神・淡路大震災関連、それから新潟県の中越地震、これらがやはり私どもの施設を考える中で検討の俎上に上がる内容でもございますので、簡単に要点を説明させていただきます。まず東日本大震災関連については、国と地方公共団体が連携しまして、主に国が中心になりまして被災3県、岩手、宮城、福島に復興祈念公園が今整備中です。伝承施設も隣接地等に整備される予定になっております。

なお、宮城県内におきましては、本市を含む沿岸13市町の方で震災遺構、それから伝承施設など、約30カ所整備しておりまして、大部分は平成32年度末までに完成の予定です。

2つ目、阪神・淡路大震災の特徴でございます。こちらは国と兵庫県が出資して整備しました人と防災未来センター、それから淡路市が整備しました震災祈念公園野島断層保存館、こちらが代表的な伝承施設になります。

なお、こちらの人と防災未来センターでございますが、特徴として伝承のみならず防災に関する研究機能も有しているというところで、後ほどご説明いたします議会の方でもいろいろ質問や提案が出ているところです。ほかにも兵庫県内を中心に288基の震災モニュメントが設置されております。

3、新潟県の中越地震関連です。新潟県の中越地震に関しましては、県の基金を活用いたしまして中越メモリアル回廊推進協議会、これは長岡市、小千谷市、それから中越防災安全推進機構さんが事業主体となりまして、異なるコンセプトを持った4カ所のメモリアル拠点、それから3カ所のメモリアルパークを整備し、中越メモリアル回廊というものを形成しております。ネットワークの考え方などでよく議論や話題になるのがこちらでございます。

そのほかに自然災害や戦争、テロなどをテーマにした施設が国内外に多数存在しております。

2枚目以降のカラー刷りは、1枚目が仙台市の施設と、それから宮城県の復興祈念公園及び震災遺構等、2枚目が福島県と岩手県の復興祈念公園とそれぞれの隣接施設、その次のページが自然災害を扱う展示ということで、雲仙普賢岳、それから阪神・淡路大震災、中越地震の施設です。

その次のページに、戦争、テロ、その他複合事項を扱う施設ということで、関東大震災、東京大空襲や広島・長崎の原爆関係。

最後のページが海外のメモリアル関連施設の例ということで、9/11のメモリアルミュージアムですとかワシントン・ホロコーストミュージアムの施設を紹介しております。

次に、中心部震災メモリアル拠点に関する市議会の質疑についてご説明いたします。資料9をご覧ください。

こちらは少し内容を要約させていただきますと、メモリアル検討委員会の提言がありましてから先日の常任委員会まで、特に中心部震災メモリアルに関する質疑をまとめたものでございます。

特に多いご意見といたしますのが、例えば1ページ目の2コマ目や2ページ目の1コマ目でございますスケジュールに関するご質問、やはり風化が進んでいることと

災 10 年の節目などでなるべく早くきちんと計画をつくってくださいというようなご質問をいただいております。

それから、1 ページの 2 つ目、3 つ目ですとか、あと 4 ページの 2 つ目、4 つ目、6 つ目などにございます体験型防災教育施設、そのほか防災教育や防災拠点としての機能、そういったことに関するご質問、ご提案をいただいております。

それから、2 ページ目の 2 つ目ですとか 8 ページ目の 2 つ目、3 つ目などにございますネットワークに関するご意見。県や他自治体との連携や協議、すり合わせをきちんとしてはいかがかというようなご質問。

それから、アーカイブの整備と利活用です。2 ページ目の一番下にございますようなアーカイブの整備、利活用。3 ページ目の下から 2 つ目にございますような「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」との協働など、そういったようなところでご意見をいただいております。

それから、3 ページ目にございます語り部や伝えていく人の育成の話。

3 ページ目の真ん中あたりにございます慰霊に関する考え方。

それから、7 ページ目の 2 つ目のコマにございますような形での、荒浜小学校も私ども連携をしておりますが、こちらはせんだい 3.11 メモリアル交流館というのが沿岸部の拠点ということになっておりますので、メモリアル交流館と中心部の拠点施設の役割分担。その部分についてもご質問などをいただいております。

最後に、今年度、沿岸部施設の来館者と市政モニターを対象にアンケート調査を実施いたしましたので、その結果につきましてご説明いたします。資料 10 をご覧ください。

資料 10 につきましては、はじめに資料の 5 ページ目をご覧くださいますと、こちらの沿岸部施設来館者及び市政モニター調査アンケート調査結果とタイトルは書いてございますが、様式があります。これで震災復興メモリアル等検討委員会の中心部拠点に関する説明を入れた上で、選択式の質問と、あとは記述式での疑問などをお伺いする設問をつくっております。

1 ページ目に戻ります。回答者の属性に関しましては、出口調査と、あとは市で登録をされている市政モニター調査、こちらを合わせた結果になっております。市政モニター調査は対象 200 名、出口調査の方は荒浜小学校とメモリアル交流館で 166 名の方に伺っております。

回答者属性の居住地に大きな特徴がございまして、出口調査、荒浜小・メモリアル交流館にいらした方の居住地は 68.1%が市外の方ということで、先ほど沿岸部施設について、ご説明いたしましたが、こちらとも内容は一致しているかと思えます。

右下円グラフ、中心部拠点の検討の認知度については、知っているという方が 1 割。先ほど様式の方で検討委員会の内容を説明させていただいておりますが、認識していたという方が 1 割ぐらいいらっしゃったけれども、ほとんどの方はご存じないという状況です。

2 ページ目です。2 ページ目はアンケートの中心部拠点に期待する役割。これは複数回答で選んでいただく形でご回答いただいておりますが、①、②等々、グラフに数字がついております。その内容の説明が下部の方にございます。①のところ、期待されている役割というところではアーカイブの機能が非常に期待されておりました。

②で囲んであるところですが、震災の経験や教訓を国内外へ発信する場所ですとか、仙台というエリアを越えた役割を求める回答、こちらが非常に多かったです。回答では、

市内居住者の方と市外居住者の方で少し特徴に違いがありましたので、ご説明いたします。

③のとおり市内居住者の方につきましては、アーカイブ機能ですとか防災について学ぶ、そういったような機能を多く求める声があったのですが、市外からいらしている方については、逆に国内外へ発信するとか全体像を知り得る場所とか、そういった部分の期待が多かったです。

④についてさらに、比較的少数の回答ではあるのですが、震災による犠牲者の追悼場所というところについて、市内居住者の方に比べて市外居住者の方が2倍ぐらいその機能を期待しているという特徴がございました。

3ページ目です。3ページ目については、沿岸部施設へ来館している方としていない方、市政モニターの調査で荒浜小学校、メモリアル交流館に行ったことがある方とない方というところで少し比較をしてみました。

その上で①のところについては、国内外へ発信する場所ということについては、来館した方よりは来館していないの方が期待をしているというところではあります。

あと、②と③について、津波だけではなく都心部、丘陵部の被害を知り得る場所、それから過去の災害の歴史を知り得る場所、こういうところに期待する部分については、沿岸部施設へ来館した方の方が期待をされているというところではあります。

そして最後、非常に大きな差があったのが、シンボリックな建築物。これに関しては数自体そもそも少ないところではあるのですが、沿岸部施設へ来館した方がむしろ期待をされているという状況でございました。

そして、4ページ目です。沿岸部・中心部拠点について知りたい情報や疑問点、期待などを自由記述で書いていただきましたところ、具体的な機能に関する意見が108というところで、回答数の中では大きな部分を占めておりました。あとは、期待のコメントや立地要件に関する意見、それから必要性に疑問を持つ意見や費用に関する意見、広報に関する意見などをいただいております。

資料の説明については以上になります。

○野家委員長

ありがとうございました。

大変充実した資料を用意していただきまして、1つずつ丁寧に説明をいただきました。説明が多岐にわたりましたのでまだ整理がついていないかと思いますが、引っかけたところとか、あるいはもう少し詳しく説明していただきたい点とか、何でも結構です。今資料に基づいて説明をいただきました点について何かご質問、ご意見、どんなトリビアなことでも結構ですので、遠慮なく発言をお願いできればと思います。はい、どうぞ、石垣さん。

○石垣委員

石垣でございます。この主な関連事業でさまざまな団体が掲載されていますけれども、これが全部ではないというふうなご説明がありましたが、これでどのくらいの割合になるのでしょうか。

例えば資料6のさまざまな、右側に団体がたくさんあるんですけれども、これでどのくらいのものが網羅されているのか、網羅というか、ここに掲載されているのかなど

よっと疑問に思いましたので質問させていただきました。

○事務局（庄子課長）

はい、どのくらいと言われますと、私どもの方で集められる限り集めて入れたようなところもあるのですが、例えば2つ目の「記憶と経験を形にする」というような事業の方になりますと、本当にたくさんの活動がなされていて、例えば先ほどメモリアル交流館の協力事業、あれだけでも結局年間でもう既に30を超えようとしているところで、それはこの中では1行ぐらいで表現されていたりしますので、特に2に関しては、何分の1とは言えないと思うんですが、限りなくもっと4倍、5倍の数字があるかと思います。

ただ一方では、3、明日へ向かう力ですとか4の拠点整備に関する事業に関しては、恐らく把握できる限りは頑張っって把握したかなというところはございます。

○大泉委員

大泉です。今回事務方の方にもこの委員を引き受けるに当たって丁寧なご説明をいただいたんですけども、こういった資料を読む限り、特に議会での質疑の中で風化に抗うとか震災からの年月が積み重なっていく中で、どちらかというやはりちょっと感じるのは議員の方々も早くしてくれというメッセージだったり、そこへの焦りだったり、ちょっとした苛立ちのようなものも感じます。

ここまで何でかかったのかというのをほじくり返すつもりもないですし、または我々が今回7回を32年度中にというようなことも課せられているわけですが、やはり少しでも早くとか、そういった思いに応えられるような仕事もこの委員会でも少しでも努められればなと思うんですけども、このタイミングにせざるを得ない理由だったり、事務的な理由だったり、丁寧な議論が必要だと、拙速は避けるべきだという考えがある一方で、やはり市民の方々だったりの「何をしているんだ」みたいなものが過剰に湧き上がらないための、納得のいく説明と言うと大げさですけども、何らかのものはちょっとあってもいいのかなとちょっと感じました。

○野家委員長

はい、では事務局の方から今の点について。スピード感が足りないんじゃないかというようなことが議会でも言われているということですが。

○事務局（高橋室長）

はい、事務局として平成26年12月に先ほどご説明いたしましたようなメモリアル検討委員会の報告書も出していただきまして、その後我々の方でもメモリアル交流館の整備ですとか荒浜小学校の整備というものをやってきたところがございます。一方では、それら東部地区における伝承の拠点などの取り組みを優先させてきたところがあって、今のご指摘になったという面が1つございます。

それともう1つは、中心部拠点のイメージでもここでは出されていたわけですけども、提言書では比較的さらりとした展示ですとかアーカイブなどのイメージも出されているわけですが、我々改めて検討を始めていく中で、やはりより深い検討が必要ではないだろうか、つまり、今回の震災がどのようなものであったかですとか、いろいろな伝

承施設が仙台市内にもほかの地域にもでき上がっていく中で、こういった役割分担をしていくべきなのだろうかとか、やはりいろいろ深めるべき問いというものがかかなりあるのかなというふうに思ったというところがございます。

それらをいろいろ検討していく中で今の時期になったというふうな事情もございまして、急がなければならないというふうなことも考えているところです。

一方で、この震災伝承というのはいろいろな方々の思いにも関わるようなテーマでございまして、やはり我々内部だけでとか、委員会だけでとかというのみならず、市民の方のご意見なども幅広くいただきながら進める必要があるだろうと考えておまして、それやこれやなどをまとめて考えまして、この時期になり、かつ、一定の期間をかけて議論をしていかなければならないなというふうに今思っているところでございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。

ほかに何かご質問、ご意見ありませんでしょうか。

いろいろなご意見の中で、やはりアーカイブ機能というものがかなり強調されている点があるんですが、これについては既に例えばメディアテークとか、あるいは東北大学の災害科学研究所でも一定程度は進んでいると思われるんですが、その辺の状況について、佐藤先生が一番詳しいのかな。もし何か補足説明がありましたらお願いします。

○佐藤（翔）委員

本学、研究所の方に震災のアーカイブという、デジタルアーカイブがあるんですが、ちょっと大きな課題だと思っているのは、実はそれのご利用があまり活発ではないということと、今のところ市民参画とか一般の方のご参加がないということなので、自省ではあるんですけども、つくったはいいけれどもみたいな状況にあることは私のパートの部分については申し添えさせていただきます。ちょっとメディアテークのことはわからないので、そこは佐藤さんの方に。

○野家委員長

では、佐藤さんからメディアテークの方のわすれないためにセンターとか、その辺の活動についてちょっと補足の説明をいただければと思います。

○佐藤（泰）委員

メディアテークのわすれないためにセンターというのは、メディアテークにスタジオという場所があって、そこがある意味市民による地域の記録をつくっていく、そういった機能と活動を行っているところなんですけど、震災後にその機能を生かして震災のことを、そのものというよりも、その後のさまざまな市民の中、あるいは地域での活動であるとか、そういったことを市民の力で記録していこうという活動を、メディアテークとしてはその場を提供し、その活動を支援し、さらにそこで集まってきた資料をどういうふうに活用するかということを取り組んできたわけですが、その中で、もちろん市民が主体的に活動して、それが伝えられていくということで、できるものはできたんだけど、なかなかできないこと、別に例えばメディアテークで、あるいは仙台市からこのことについて記録しておかなければいけないからぜひお願いしますということは言っ

いないんです。

(市民自身が)自分たちがこれはやった方がいいと思う、あるいは自分たちだったらこれができるかもしれないということについてずっと取り組んで、それが残されてきているので、今後それをどう活用するかということも課題になると思いますけれども、何を残すべきなのかということの議論は仙台市として改めてきちっと整理していく必要は残されているんだろうなというふうに思っています。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

ご希望のアーカイブ機能にしても既に進んでいるプロジェクトとなるべく調整しながら、余り重複して屋上屋を重ねることがないようにしていかななくてはならないと思うんですが、また、この我々の委員会に課された課題、幾つかのご希望や要求を調整しながらベストのものをつくっていかなくてはならないと思っていますが、先ほどのたくさんの資料、まだ読むのに時間がかかっているかと思いますが、どんな小さいことでも構いませんので何か確認しておきたいこととか、あるいはここのところはどうなっているんだろうというようなこと、もしご質問、ご意見ありましたらよろしくお願いします。

○佐藤(翔)委員

仙台市さんへというか、もしかしたら前委員会の本江先生になるんですけども、今回6つの柱を立てられて、非常に細かいことで恐縮なんですけれども、概念図が6本の柱で(図に)傾斜があると思うんです。真ん中の「記憶と経験を形にする」というのが真ん中に位置づけられていて、両サイドに傾斜があるんですけども、非常に細かいことで恐縮なんですけれども、この図がこういうふうになった経緯とかあったらつけ加えていただけませんかでしょうか。

○本江副委員長

これね。これ僕が答える立場かどうかわかりませんが、当時の委員であった者として言うと、これそんなには形には意味はなくて、真ん中が少しほかよりも背が高いとか、1番だとか、そういうことでは必ずしもないんですが、全体としてある柱が3本あって、ある立体的な形になりますよと。ただ並んでいるんじゃなくて、3つ柱があって空間をつくって大きいものを支えていきますよというふうな、そういうパースになっているというような感じではないかと思います。

○佐藤(翔)委員

プライオリティーではないんですね。

○本江副委員長

プライオリティーではありません。そうではなくて、それぞれのディレクションが違ふところを押さえるということになっていたかと思います。

○遠藤委員

委員長にちょっと確認なのでですけども、ご質問とかご意見ありませんかとおっしゃ

っていただいたので意見をお話ししてもいい時間でしょうか。

では、事前資料をいただいていたので私なりに今後の、今日議論したいというよりは今後皆さんと議論をしてみたいなと思った項目が結構ありましたので、ちょっとお話しできたらなと思っております。

私は先ほどの自己紹介でもお話ししたように復興支援団体、NPO、NGOの皆さんと一緒に活動していたりもするので、そういった復興支援の皆さんがこういったメモリアル施設をどう使っているかという、やはり先輩の被災地に伺って、そしてその現場を見て、施設を見て、学んで、そして、そこでは施設の展示だけではなくて、やはりその過去の被災地で被災された方や支援された方のリアルなお話を伺って初めて腑に落ちるというんでしょうか、施設と人がセットみたいなのところがあるので、そのような施設と人がセットというのはやはり効果的じゃないかなというふうに思いました。

あとは、やはり復興支援の活動をしていると、そのフェーズごとに必要な情報というのが今度違ってきます。そうすると、一度に情報というのは頭の中に入りませんので何回か行くということも出てきたりするんです。そうすると、このアーカイブの質も復興支援といいましてもさまざまな活動があって、プロセスもさまざまなプロセスがあるかと思うので、そのあたりをアーカイブしようと思うと結構なかなりの情報量になるのかなと。ただ、そういったことがアーカイブされているところというのは余りないんじゃないかと思うので、そこまで力を入れるべきなのかどうかとか、私は入れてほしいなという気持ちもあるんですけども、そういった点もアーカイブの質と量を検討する必要があるんじゃないかというようなことです。

それと、今までのお話の中でメモリアルのアーカイブの機能と、あと防災の機能もということも議会からもあったりということで、そういったメモリアルの機能と防災の機能と、あと教育機能。教育機能となると今度は教育、一緒に学び合うような、そういった空間というものも必要になるかと思しますので、そうすると、その施設規模にもかなり影響があるんじゃないかなと思うんです。

施設規模に影響があるとなると、今度立地にも影響してくるのかなと。立地に影響することを考えますと、今仙台市内では音楽ホールと、あとは市役所の新市庁舎、あとは県民会館とか、そういった施設の検討がされていますので、それらとの回遊性ですとか、新市庁舎にこういった震災の何かアーカイブみたいなのをつくるのかつからないのかとか、そういうことも関係してくるのかなんていうふうに思っています。

あとは、施設としての教訓、教訓と言ったら大変失礼なんですけれども、戦災復興記念館が今ちょっと静かな状況かなと思うんです。ですので、やはり戦災復興をアーカイブした記録した戦災復興記念館というものを少しいい意味での教訓にして考える必要があるのかなということ。そういったこともちょっと感じました。

あとは、仙台と被災地全体ということを考えますと、先ほど佐藤先生がほかのところにも関わっていらっしゃるというお話だったので、そういった被災地のほかの施設の皆さんは仙台の拠点施設に何を期待したいとか、そういったことを聞いてみるのもいいのかなというふうにちょっと感じたりもしました。

あとは、やはりどなたかの記録にもありましたけれども、記録だけですと動きが少なかったり現代性とのつながりというのが弱くなると思うので、今とつながるような何か工夫とか企画とか、それが建物なのかハード面なのか。その現代とのつながりの工夫ということもソフト・ハード面で考えていく必要が、検討していく必要があるのかなと思

いました。

以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。実は今日初回ですので皆さんからご意見を伺う時間を取ろうと思ったんですが、もう遠藤さんに始めていただきましたので、アイスブレイクをしていただきましたから、時間が大分迫っておりますので、各委員の皆さんから今の遠藤さんのご意見のように今後の取り組みについてのさまざまなご意見あると思いますので、余り長くならない程度に一言ずつ是非今後の委員会の進め方あるいは焦点の当て方を含めまして、ご意見をいただければと思います。

それで、先ほどの説明の中にございましたように、仙台市のみならず、行政や民間という枠を越えてさまざまな取り組みがもう既に行われております。また、宮城県やほかの市町村でもハードの整備を初め、取り組みは既に進められていますし、また、震災遺構をどうするかというような議論もご存じのとおりいろいろ行われてきました。

これらの状況のほかに、先ほどから繰り返していますが、記憶の風化と、それから災害のさまざまな局面の忘却ということも含めて、今後改めてどういう取り組みが必要なのか。仙台市の中心部のメモリアル施設ですので、そこで何が可能なのか、何をすべきなのかといったことを一言ずつ皆様からは是非ご意見をいただきたいと思いますが、時間もありますので大体3分から5分程度で、またあいうえお順で申しわけありませんが、石垣さんからお願いできればと思います。

○石垣委員

すいません、まだたくさん資料を前に、事前にはいただいていたんですけども、あまりにもやはり情報量が多くて、こういうものがアーカイブされていたとしても、一般の市民の皆さんのところにどんと提示されたとしても、消化不良に陥って、結局は素通りしてしまうような状況になるんじゃないかなという感じは今しております。

つい先日、神戸の人と防災未来センターの方に行ってその施設の方も見学してきましたんですけども、語り部の方がいらっしゃって内外の観光客の方はいらっしゃる。あとは修学旅行生は来る。地元の方は震災のことはほとんど話をしない。1月になると1.17があるので話題には上るけれども、次の3.11に向けての何かイベント的なもう扱いになっているということをおっしゃっていて。今回の中心部の拠点に関して言うと、1つはそういう内外の方が観光なりなんなりで被災地、東日本大震災の被災地の東北の拠点としていらっしゃったときに見せられる何かというものは必要だと思うんですけども、もともとのメモリアルに込める思いで、「仙台市民一人ひとりが東日本大震災の記憶と経験を未来へ」というところで、やはり地元の皆さんにとってここで代々住んで、移り住んでくる人もいるでしょうけれども、そういう方たちが記憶を、教訓を、どういうふうを受け継いでいけるかということ、やはり建物だけの話ではなく、先ほどどなたかの話にもありましたけれども、人の育成、プログラムなりなんなりをつくっていく、研究機関というんでしょうかね、研究、取り組みをしていく、市民にアクションを起こしてもらえようような仕組みを考えていく場、というのが確実に必要なんだろうなと。

それをどういう形で、あくまでも東日本大震災の教訓をみたいなのをずっと何十年も言い続けて皆さんが振り向いてくれるのかというのは非常に疑問で、もう既に8年の

段階で、弊社で『サバ・メシ防災ハンドブック』というものをつくっておりますけれども、サバ飯、サバイバル飯、皆さんでつくってみましょうと言っても、そんなにそんなに皆さんの反響というのはどこか冷めた引いたようなところを前に放送イベントを通じて感じる場所もあり、ただ、何かはやらなければいけないというような感覚も一方でまだ持っているというところで、どういうふうな切り口でアプローチをしていけるかという、震災はもちろん1つ中心にあるとは思いますが、さまざまな、縦割りではなく、いろいろな部署を連携してつなげるような意味での拠点、ハブが必要なのではないかなというふうに感じました。

○植田委員

はい、私も本当に丁寧なご準備の資料で、ちょっと正直全部消化し切れない部分はあるんですけども、何かでもご用意いただいた資料の中で福島県における復興祈念公園というふうなプランをここで紹介していただいております、そこで気づいたんですけども、復興祈念の「祈」が祈るの「祈」になっているんですよ。メモリアル「記」ではなくて祈るの方の「祈」になっていて、沖縄なんかではひめゆり平和祈念資料館とか県の平和祈念資料館の方も祈るというふうな字になっているんです。

アーカイブ、全部揃えてパッケージにしたら完了ではなくて、やはり平和とかと同じように災害を乗り越えられる準備をするということも常に移り変わっていくというか、やはり生ものとしてずっと更新し続けられるようなものである必要があるんだろうなという、何かそういう市民に開かれていて、それから、今は語れないけれどもやはり時間が経ってからやはり語りたと思う方も、お辛い経験をされた方は風化というよりはむしろなかなかまだ振り返られないという方も中にいらっしゃると思いますし、そういう本当に祈念というのは祈るの方の祈念のような拠点というか、箱かどうかわからないですけども、そういうふうな場所をつくっていただけたいなというふうに感じておりました。

○大泉委員

一回目なので、まだちょっと私自身もぼんやりしているところがあるんですけども、そもそもやはりこういったメモリアル拠点というものをなぜつくらなくてはいけないのかなと自分なりに考えるときに、やはりこれだけ多くの方が犠牲になったという犠牲の重さと、それから、暮らしが奪われた、幸せが奪われたという、そのことをやはり伝えないとある意味犠牲が無駄になるということの罪深さだったり、または同じ犠牲が繰り返されてしまうのではないかという不安だったり、そこにちゃんとそれを繰り返さないために、犠牲を無駄にしないために私たちは何をすべきかということがやはりこういった施設には問われるんだと思うので、それは今後の議論の中で、こういったある意味建物なのか施設の中で何をさせる、何を語るというのは吟味していかなければならないと思います。

ただ、今までいろいろな雲仙だったり阪神だったりのところを私も施設に行ってきたけれども、やはりぱっと見れば起きたことを見聞きするとうわっと思うわけですよ。特にやはりうわっと思うんだけれども、では家に帰ってくるとそれを忘れるではなくて、多分大事なほうわっと思ったことを今日から、今から何するのというふうな個別具体的な実践にまで落とし込めるメッセージというのは多分必要なんだろうなと思いま

す。

なので、そのうわっと思う、被災地に行って悲しい、切ない、いろいろ思いを抱くんだけれども、冷静になって考えたときに「では今日から何する」という落とし込みを是非こういった施設で伝えられればなというふうに思います。

あと、もう2つです。

1つは、広い今回の被災地の中でこういった伝承施設の議論は進んでいるわけです。どちらかという仙台はもう後発になりつつあると。とはいえ、仙台は東北のゲートウェイとしての機能も持とうとこの中では謳われているわけです。なので、ほかのところがないことを後追的というよりは、むしろもう1回「いや、仙台だからできること」というものも、お節介ながらもかもしれませんけれども、やはり仙台ならではの機能もやはり追求していきたいなと思います。

もう1つ最後が、今、時がこの市役所の建替えも含めてこの街における新たな施設の全体的意味です。震災のというよりは、街のグランドデザインの中でこういったものがどういった機能を副次的にでも持つのがいいのかと。少子高齢化だとか何とかという時代の中で、にぎわい創出のためにこういった施設がどんなことを担えるのか、施設そのものが新設が良いのか、どこかの施設に抱き合わせだったり、またはどこか今のところに入るのが良いのかも含めて、時代的役割というか、そういうものも踏まえて、ある意味震災だけに特化すると、何か独りよがりな施設になりそうな気もするので、そういった複眼的な見方もできればなと思っていました。よろしくお願いします。

○佐藤（翔）委員

ご説明ありがとうございました。

今日モニターさんと出口調査のアンケートの一部をご紹介されたんです。今日その中になかったことで追加の情報があるんですけども、自由回答にはあったんですが、市政モニターさんで、要は来ていない人にも回答をいただいているんですけども、何で行かないんですかという理由のトップ2が、まずはやはり震災のことにアクセスしたくないんだという気持ちの問題です。もう1個は実は遠いからという物理的な問題でした。

そういった意味で、その言葉を裏返すと、中心部に機能があるということは遠いからという人たちに対するレスポンスにはなるわけです。それは中心部に機能があることの良い面として今申し上げました。アンケート結果からです。

一方でなんですけれども、これはさっきのご紹介にあった中越メモリアル回廊のことなんですけど、あそこは長岡市がその中心部としての位置付けを担っているんですけども、長岡の施設が（人の）入りがよろしくないんです。というのも、要は震災を勉強するということは現場とセットであることがとても大事で、ほかの3つ（の施設）はまさにいろいろな現場と直面しているようなところですから、やはり現場が持っている魅力に負けてしまって中心に集まってこない。パスはしているんですけども、そこにはお客さんは来てくれないという、今のアンケート結果と中越の実情の何かジレンマみたいなものはあるということは情報提供としてさせていただきたいと思います。

そのときに、今日遠藤さんがもうおっしゃっていたんですけども、中越の中で一番入りが良いのは小千谷にあるそなえ館というところなんですけれども、要はその名のとおり防災教育を専攻する施設になっています。興味深いのが、防災教育といったときにその地域の小中学生対象であること、あとは修学旅行生が対象であるということで、何

と外向きでもあり内向きでもあるということで、とても理想的な機能を持っています。

そういった意味で、中心部かつそういった機能もあった方がいいなと思って、さっきの遠藤さんの意見を聞いたときにとっても共感いたしました。

そういう意味では、仙台市さんには防災の部局の方でSBL（仙台市地域防災リーダー）の取り組み等もありますので、子どもから大人までのそういった機能があると補完できるのではないかというふうに思いました。

それで、もう1個また中心部の機能に対してネガティブなことを言うてしまうんですけども、さっきこれは石垣委員がおっしゃっていましたが、人と防災未来センターです。出身者がいる前で恐縮なんですけれども、全員が全員じゃないと思うんですけども、神戸市民の皆さんがやはり客体化している部分がございます。私のものではないと。要は世界へのもの、よその人のものという感じの象徴になってしまっているのが少なからず多からずあると思います。

なので、その「中心部」となるのももちろん求心力もあるんですけども、地元の人の求心力を奪う可能性もあるので、今日全部今矛盾したことばかり申し上げていますが、そういったことがあるので、私もこれを踏まえて考えていきたいと思って今日はお話をさせていただきました。

以上です。

○佐藤（泰）委員

この中心部震災メモリアル拠点というお話の中で、それが中心部であるということの意味についてですが、仙台市にとっては市の中心部という話だと思うんですけども、考えてみると仙台というのは今回の被災地全体の中で3県の中心的な場所にあり、しかも人口が一番多い。人口が一番多くて、都市としての機能も集約されている。

そういった意味で、ある意味仙台の中の中心というよりも今回の東日本大震災の中での中心的な役割というものが何らかの形で求められるというふうに思っているところがあります。

ただ、被害自体はほかの大きな被害を受けた地域とは違うところもあるので、そういう意味での中心ではないですけども、ただ、これだけ大きな災害を受けて、その後復興に向けてさまざまな活動が続ける中で、それに立ち向かっていく一番大きなパワーを有する可能性のある場所ではあるんだと。そういったことがやはりこの委員会でそういったことを前提にして検討されていくといいなというふうに思っているところがあります。

例えば記録を考えると、100年後とか200年後とか500年後とか、そのくらいの本当に長いスパンで考えて、しかもそれをじっくり育てていくためにはそれなりの体力が必要なんです。

アーカイブ一つ考えてみても、アーカイブというのはかなり専門的な知識も必要だし、さらにそれを継続していくための人手というものはものすごく必要なんです。なかなかそれが実際はそこに人手も回らないし、専門家も少ない中で、実際はやれる範囲でやってきているというところがあるので、なかなかその成果を十分に生かすというところまでいかないというのが実態のところもあります。そうした記録をきちんと伝えていくためにはかなり大きな労力を割く必要がある。

そういうことを考えたときに、それだけの体力を持ってやれるのが仙台なんだという

ことも、どこかに我々の心構えとして持っていたらいいのではないかと。

そのためには、石垣さんから最初にちょっとありましたけれども、施設はもちろん考える必要があるかもしれないけれども、まずその前にどういったことを誰がどういうふうにやるのか、何をすべきなのか、我々に求められていることは何かということをも、何よりも大切に考えて、そのためにどれだけの人手がかかったり、どれだけの時間がかかるのかということを見積もっていくと。そこで最終的に必要な施設があるとすればそれは何なのかというふうに議論が進んでいけば、先ほどもちょっとお話ししましたがけれども、いいかなというふうに思っています。

今回の災害では想定外という言葉がよく聞かれましたけれども、今回の災害で私自身が一番に思うのは、「想定外というのはあるんだ」ということでした。つまり想定外のことがあるということをも我々は学習したんですけれども、だとすれば必要なのは、そこであったことをひたすら伝え続けることだけではなくて、これから起き得るそれ以外のこと、想定外のこと、つまり東日本大震災で経験したこと以外のことが幾らでもこれから起き得ることを伝えることではないか。我々の社会にはそういったリスクがあるんだということを前提として考えたときに、ではそれにどう向き合って、その中でどれだけ今後被害を小さくできるのかということをも考えるということもすごく重要な視点だと思います。例えば三陸大津波という言葉がずっとあることで、逆に宮城県の南の方ではまさか津波が来ると思わなかったみたいなことがやはりあるわけですから、そういったことも含めて想定外ということについてどう伝えていくかということの課題もあるのかなというふうに思います。

ちょっと長くなってしまいました。すみません。

○志賀委員

今日、今この話を聞きながら、3月11日が実際どうだったかということをも思い出していたんですが、目の前でたくさんの方が水の中にいて、死んでいるという状態がやはりありました。

個人レベルで毎日のレベルで言うと、やはり忘却、忘れるということをも体全身で行ったということが今の私を支えていますし、集落の人たちも忘れなければ、今いられないとか、発狂してしまうような心があったと思います。

だから、忘却というのが一体何なのかということもすごくあるんですが、でも、それよりも前に被災のレベルというのが個人で余りにも違うということをも、すごく突きつけられたこの何年かであったということがあって、そういう意味では何か自分の中では抽象度を上げてこの震災に対して考えていくということをも自分自身がそれを乗り越えていくということをしていたと思います。

だから、とても1つの物語にはまとめられないというのがあるんですが、でも、真っ暗な夜に全てのものが水の中にあるという、フラットになってしまった世界というものを今私がどう考えているかということ、やはりその前がどうだったのかということと、その後何が起こっていったのかということ、その1日を起点にした前と後ということにもやはり言えると思います。

というのは、やはり震災前は少し斜めに構えて何かがよくないとか、社会がよくないとか、何かそういうことをすごく思いがちな感じもありましたけれども、でも、やはりフラットな夜はとても怖く、これこそが現実なのだとも痛感しました。そしてその後復興

に関するあらゆる資本の動き等で、いろいろな価値があらゆる現場でものすごい勢いで帯びたことにも、複雑な思いになったこともありました。

そして、震災後7年の時間では、あの時亡くなったしまった人の「死」の意味が、あの頃とは変わったように思います。

もう1つ言うと、人が住んでいるところが全く破壊されてしまったという、破壊には意味があったのではないかと今は思うんです。というのは、何かを見たりして、どんな日々小さいことでも、何かを見たりして少し価値観が変わるようなことというのは傷つくことでもあるからです。だから、やはり人の死によって気づかされたことがすごくたくさんあります。

なので、もしそういう文化とか芸術などに関する何か、それはまだわかりませんが、この会議から立ち上がるということがあるのであれば、今の現実をもっとよく見たり、向き合うための施設でなければならないかなと思っています。それでなければ、未来に対してアクティブではないし、過去に対してもアクティブではないし、例えば以前あったいろいろな震災とか戦争とか、もしくは今後あるであろうことに対してアクティブでなくてはならないということを思ったりもしています。

そういう意味で、何かちょっとモニュメントって「ええ？」みたいな、すごく思うんですけれども、それがどんなものかわからないですが、やはり愛されるもの、住んでいる人、地域の人に愛されるものでないと、やはりそういうものであってほしいなという、それが1本の木なのか、何か立体物なのか、何かわからないんですけれども、そういうものであるべきだと思います。

では、どうやったら愛されるのかということを考えると、やはり1つの物語にはできないけれども、1つ大きな何か破壊とか死から生まれた、そういう生々しい、とてもダークかもしれない、そういう沢山の物語が背後にあるものであるべきなのかなというふうに思いました。

何かちょっと余談なんですけれども、スウェーデンに行ったときに詩人で自殺をしてしまった少女の像がまちにぽつんと、すごく素朴なものなんですけれども、あったんです。それをそのまちの人とはとても愛していて、冬が来ると帽子をかぶせたりとか、毎日誰かが花を持たせたりとか、そういうふうになんか愛されている素朴な少女の像があったななんていうことを今さっきちょっと思い出したりしていました。愛されるために、何かを作るのは違うとは思いますが、「物語」がこの地域に住む各々の個人に繋がることでもしできたりしたら、と切実に思います。

ちょっと長くなりましたが、以上です。

○マリ委員

またいろいろ頭の中に情報が入ってまだちょっと整理できていないんですけれども、私個人的な意見から3つのテーマをちょっと言いたいなと思います。

1つ目が、もう遠藤さんがおっしゃったとおり人と施設が必要。私は場所、人、物、3つを揃えないと伝えていけない。逆に私が今まで見ている施設と展示がそれは伝えてあったということがその3つ。場所があって、本当の物、被災した物とかにリアルに感じるができる物と、人が、自分の経験から説明できる語り場とか。場所、物、人というセットがあってうまく展示、「ああ、それいいな」という気持ちになります。

荒浜小学校は多分そういう3つがお揃いになりますからすごいインパクトがあります。

こういう場所があります。リアルな場所があって、リアルな小学校、建物と物があって感じることができます。大変お世話になっていて、いろいろな人が来ると必ず連れていきますという場所になります。それと語り部とお揃いになります。

それで、仙台市全体のことを考えると、同じ3つの機能をどういうふうに揃えることができるかということが多分大事な質問かなと思ひまして。もしかして新しい施設じゃなくて、あるものでうまくつながることも、メディアテークの役割がとても大きいと思います。3がつ11にちをわすれないためにセンターも多分同じ、まだちょっと全市とかレベルじゃないんですけども、ある意味で人、物、場所、3つがうまく連携できると思います。

2つ目のテーマは、人と防災未来センターのお話は出まして、強い面と弱い面は両方あると思いますけれども、強い面はそっちに行く勉強できる場という教育の、佐藤さんがおっしゃったとおりに多分教育、防災の勉強をできる施設が仙台市もできる力もあると思いますし、それは結構、今まではもうちょっとあった方がいいんじゃないですかということがあります。

3つ目は、海外からの視点がありますけれども、多分日本人でも外国人でも同じかもしれないんですけども、特に海外からの人にどういうふうに説明するとか、やはり大泉さんがおっしゃったとおりに仙台がゲートウェイの役割、とりあえず仙台に来てやはりそのものを勉強してから別のところに行けるようなことがすごい大事な役割で、そのネットワークの性格が多分仙台市内にある施設をつなげることもあるし、地域につなげる、あと地元の文化、東北の文化も大事にしないといけないなと思います。

以上です。ありがとうございます。

○本江副委員長

本江でございます。僕自身も先の委員会の委員でしたので、その時のことも思い出しながらちょっと話をしたいと思ひます。この委員会の中でたくさんの議論がもちろんあったんですけども、僕が一番よく覚えていることの1つは、前の市長がずっとこの委員会に参加しておられて、行政というのはいろいろなことを簡単に終わりにしたいんだと、一丁上がりしたいと、仙台市のメモリアル活動はこれで終わりだということをやりたいと思ひがちなんだということをやられた。続けて、ただ、この委員会での議論を聞いていると一丁上がりにはさせないということを皆さんがずっとおっしゃっているということと理解した、大体そういうような意味のことを市長がおっしゃっていました。だから、今もたくさん出てきましたけれども、何かをやればこれでメモリアル事業が終わるとか、でき上がりました、なのでそのことはもう忘れてもいいんですというふうにはならないのであって、何かずっとやり続けるということを表示をしないでいいなというふうには、メモリアルのことを考えるたびに前市長のこの発言のことを思い出します。

それで、ちょっと僕も話すために考えてきたことを申し上げます。ちょっと逆張りのことを申し上げますと、震災のメモリアルのことを考えるときにはどうしても、やはり志賀さんがおっしゃったように大変なインパクトのある出来事であったと言いたくなる。我々は何かその刻印を受けていて、何かある種、悲壮な覚悟と責任感を持ってこの震災について語り継いでいかなければならないと。もちろんそうなんですけれども、一方で志賀さんが、必死で忘却をしなければならなかったとおっしゃったように、それだけで

ずっと続けられるのかということがあります。

このメモリアルの施設を持つ、そして、それを運営していくことが仙台市の未来にとってどういう意味を持つのかということを考える必要があります。もちろん震災のことを忘れずにおくということもありますが、その過去のことをつかまえておく、忘れずにおくことで、未来にどんな意味をもたらすのかということを考えなくてはならない。ちょっと変な言い方かもしれないけれども、仙台市の都市としてのアイデンティティに関わってきます。仙台市というのは被災をした場所であり、そのことを通じて災害について考え続ける、そういう文化を持った都市である。仙台のユニークな属性の1つとして、大きな災害を受け、そこを乗り越えて今日があり、そして、これから来るたくさんの災害に対してもどう対応していったらいいのかについての知恵のセンターなのだということが、世界の中での仙台の役割としてある。そのための拠点施設がある。

特定の「The 震災を覚えておくための施設」というよりは、災害と共に生きるためには何が必要かということを発信する、仙台はその資格があると思います。この拠点は何かそういう役割を果たすんじゃないかなということを考えています。

今ベストセラーの「ファクトフルネス」という本があります。これはおもしろい話がいろいろ出ていて、その中で災害の質問があるんです。世界の自然災害で毎年亡くなる人の数は過去100年でどう変化したでしょう。1、2倍以上になった。2、余り変わっていない。3、半分以下になった。正解は3、半分以下になった、です。自然災害では人はどんどん死ななくなっています。100年間で比べると25%ぐらいになっているんですって。それはもちろん対策が進んだとか、救急医療が進んだとか、豊かになって安全になってきたとか、家が丈夫になってきたとか様々な理由があります。

だけれども、半分以下になったと聞くと「え、そうなの？」と思うじゃないですか。この質問を世界中ですると、ほとんどの人が間違えて、正解率は15%ぐらいなんですって。つまり、世界の人ほとんど災害はどんどんひどくなっていて、もうますます我々は災害に苦しめられていると思っていますが、事実は世界は前よりもずっとよくなっているのです。もちろん悪いことは起きている。でも、悪い状態であるということとよくなっているというトレンドがあるということは別に矛盾しない。世界は、よくなっていますという話なんです。

災害に対する対応はだんだんよくなってきているということをやはりわかっていなくてはいけません。一方で、だからもう安心していいということももちろんない。不断の努力の積み重ねによって世界から災害で死ぬ人が減っているんで、そのことをやめてはもちろんいけない。何かダイナミックに災害の被害を抑制し続けることが多分必要で、「The 震災」の話と来るべきたくさんのこれからも起こる災害ということとの関係の中で、「The 震災」だけじゃないこともやはり引き受けていって、そういう災害に対応する都市の文化をつくる、そして、それを共有していくような役割を担うということになるんだろうなというふうには思っています。

それで、このもともとの委員会のことと言うとそんなことまでは書いていないなと思いつつながら改めて読んだんですけれども、でも、この委員会を話していたときからのそれからの時間のことを考えると、その間で日本だけだって熊本の地震があるし、西日本の豪雨があるし、北海道でも大きい地震があったりする。何かぼやぼやしているとワン・オブ・ゼムになるみたいなどころがあるんだけど、でも、その中で先ほども申し上げた災害に対する不断の努力をしていくという災害の文化を人類が持っている、その

成果として亡くなる人が減っているという、マクロで見たときにはそういう事実があるということをやちゃんと捉えて、未来に向かったそれを続けるということをや、何かそういう災害文化についてのセンターを未来志向で持つことが必要なのではないか。

そういうまちとして仙台があるということや掲げていくことができると、悲壮な責任感だけで続けるのではない、仙台が、例えば何か新しいビジネスを起こしていくときに災害文化をきちんと持っているまちであるということやアピールしていくとか、そういうことに広げていけるような、何かそういうセンターになり得るのではないかなというふうや思っています。

それはもちろん「The 震災」を軽視していいということにはならないですけども、そうした役割があるかなということや考えていて、それは当初の要件よりも少しスコープが大きくなっているかもしれないけれども、でも、そうしないと過去志向の、文字どおり狭い意味でのメモリアルの施設になってしまっ、だんだんみんなから忘れられていっ、「あつたね、そういうの」みたいなものになって、それは一面いいことでもあるんだけれども、でも、それだけだとやはり続けていくということには弱いのではないかなということや思いました。

ちょっと長くなりますけれどももう1個全然違っ話をします。僕は大学で社会課題解決のデザインスタジオをいろいろな分野の学生たちと一緒にやっています。全然違っ話をします。

そこで、今年やっ1つのテーマが「ステルス防災」という、ちょっと軽い名前のもんです。要するに見えない防災。気がつけば防災をやっているみたいな、何かそういうサービスとかプロダクトをつくることはできないかということや学生たちと一緒にやりました。

どうしてそういうことをやるかという、防災活動というのはやらなくていけないってもうみんなわかっているけれども、でも、日常でやっていることプラスアルファとしてやるしかないことなので、やはりちょっと大変じゃないですか。日常でいっばいっばいだとなかなかできないんで、何かもうちょっと普段どおりのことをやっているといっつの間にか防災の活動をやっていることになるにはどうしたらいいかみたいな、そういう問題設定でやりました。

何をつくったかは説明し出すと長いので今は言いませんが、いづれ何かご紹介できればと思っますけれども、それをやるときに多賀城の子育て支援施設「すくっぴーひろば」の皆さんと協力してやらせてもらった。それで、僕らがつくった案を持っていって見せると、要するに子育てをしていらっしやるお父さん、お母さんというの、いっばいっばいの人の、チャンピオンみたいな人ですから、「こういうの、どうですか」と持っていくと、「いや、そんなのやってられないわよ」と、「あなた、子育てわかっていない」みたいなことを言われるわけです。却下されたものを改良してまた持っていくみたいなことを何度かやっっていたんですけども。

子育てママさんがいっばい集まって我々の持っていった提案をおもしろげに見てくださって、良い悪い言ってくれるんです。多賀城ですが、被災したときの経験をお持ちの方がおられる一方で、多賀城って結構人が入れ替わるので、若いお母さんで震災のことを知らない方もいる。どうも今住んでいるところは水が来たらしい気にしておられる。僕らが持っていったものを見せていると、そのお母さん同士で「ああ、こういうことがあるんですか」とその若いお母さんが聞くと「そうなのよ」みたいなお話をされたり

して、何かだんだん被災されたお母さんと来たばかりのお母さんが我々そっちのけである時何があったかみたいな話にわーっとなったりする。

それは良いことだなと思いました。災害の経験というのはこういうことであるというオーソライズされたものが提示されて「ははあ」と受け取るんじゃなくて、「私はこうだったのよ」みたいな人たちが赤ちゃんを抱いている同士だとやはり違う感じで話せるみたいなことがある。何かみんなが話すというか、みんなが持っていることを直接伝え合うような。状況さえつくればそういうことは起こるなというふうにも思いましたし、何かそんなような市民が活動する場所、研究機関とか市民がアクションを起こしてもらう場所、石垣さんもおっしゃったけれども、そういう場所をつくり出すことができればそれで結構回る部分もあるなと思っています。何かミュージアムみたいなものをつくって提供するというモデルじゃない、市民協働の仙台市ですから、何かそういうようなモデルで考えることができるといういいなということも思いました。

なので、まとめると、まず大きい意味での災害文化をつくる、未来志向の、仙台市のアイデンティティとして考えるというフレームを持ちつつ、それを市民の草の根というか、お互いに話し合うみたいなやり方でやる。両者は矛盾しないと思いますので、何かそういうイメージを持ってつくれると、何らかのミュージアムとモニュメントをつくるということとは何か違う、アクションの場所をつくるということができるといいんじゃないかなということも思っているという次第でございます。

ちょっと長くなりました。そんなところです。

○野家委員長

どうもありがとうございました。

ほとんど時間がなくなってしまったんですが、僕も一言言わざるを得ないような立場ですので、今皆さんからいろいろなお話を聞かせていただいて、これからこのメモリアル施設についてさまざまなヒントになるようなことを提案いただいたと思っています。

それで、僕が一番この話をいただいて協議に加わってくれと言われたときに思い浮かんだのは、箱物をつくって一丁上がりにはしたくないということで、今本江さんの話にもあったけれども、何か博物館みたいなものをつくって、それでそこに展示ができれば終わりだということにはしなくて、持続的な活動の場というものをつくっていくことがやはり私たちの使命かなと。

そして、そのときにキーワードになるのは、私の言葉を使うと1つは「世代間倫理」という言葉があるんですが、それからもう1つは先ほど志賀さんが言った「物語」ということです。

世代間倫理というのは、倫理というのは普通は同時代に生きている人間が、さまざまな振る舞いのルールが倫理なんですけど、こういう災害ということはやはり将来世代、未来世代にちゃんと体験、経験を伝えていくということが大事なので、そういう倫理というのが世代を越えて次の世代へバトンタッチされるような、そういう場をつくっていききたいということが1つでした。

特に今回の震災というのは福島原発事故というものを誘発して、放射能の半減期は何千年という単位ですから、1世代で終わることではないわけです。だから、そういう意味では世代間をつなぐような、まだ顔が見えていない将来世代、50年後、100年後の世代をも射程に入れたようなメモリアル施設が必要だろうということです。

それからもう1つは物語ということで、先ほど志賀さんが被災のレベルというのは非常に人によって違っていて、とても1つの物語にそれをまとめることはできないとおっしゃって、それはまさにそうだと思います。

ただ、もう1つ物語ということで私の印象に残っていたのは、震災の直後に名取市で精神科の診療所を開いておられた、今でも開いておられる桑山紀彦さんという精神科医の方が、いろいろな方がやはり精神に変調を来して相談に来られると。そういうときに、震災というものによって、今までいわば自明のものとして自分が受け入れてきた家族あるいは周辺の自治体とか、そういうことに関する物語というものが津波や地震によって崩されてしまったと。しかし、もしもう一遍立ち直ることができるのであれば、もう一遍物語を紡ぎ直すほかないんだということを言っていて、非常に印象に残っていました。

だから、我々は自分の家族についての物語とか、僕自身も今までずっと生まれたときから住んできた家が全壊になりまして、初めて被災証明書というものをもらったんですけども、僕の親父が生まれたときに建てた家で、もう築100年ぐらいの家だったんですが、いろいろな思い出やあれが詰まった場所だった。それが全壊で更地になってしまって、そういう今まで自分が自明のものとして受け入れてきた物語がいわば更地に戻ったんです。

しかし、そこからもし一歩踏み出すとすれば、やはり新しい物語をもう一遍紡ぎ出すことが必要で、そのことによって自分の経験というものを、崩れた自分の経験というものをもう一遍立て直すということができるということをその桑山さんという精神科のお医者さんが言っておられて、まさに自分のことに引きつけてみてもそういう物語を紡ぎ直すという作業。

それはもちろん1つの物語にまとめる必要は全くないので、むしろ多様な物語が交錯する場というか、そういうものをこのメモリアル施設が持つことができれば、被災した方にとっても、それから将来のこれから生まれてくる世代にとっても重要なことかなと、そんなふうに考えました。

また今後とも皆さまのさまざまなご意見を伺いながら、そのメモリアル施設をぜひ有意義なものに形を整えていきたいと思っておりますので、よろしくご協力をお願いしたいと思います。

それでは、皆さまから本当は発言いただいたことについて少し議論の時間をもちたいと思っていたんですが、残念ながらもう時間を過ぎてしまいましたので、今皆さんからいただいたいろいろなご提案、ご発言、アイデア、そういったものをもとにして、それから事務局から用意してもらった大量の資料、私も全部隅々までは目を通しておりませんので、もう一遍持ち帰っていただいて目を通した上で2回目以降の会合を有意義なものにしたいと思っています。

それでは、短時間ではありましたが貴重なご意見を賜りましたことにお礼を申し上げると共に、議論し尽くせなかった点については別途ご意見をメールとか書面でも構いませんので、事務局の方にお寄せいただければ、それをもとに2回目以降の議論を組み立てていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。そんなことでよろしいでしょうか。

それでは、最後に議事の方にその他という項目があるんですが、何かこの場で次回以降の議論についてご提案とか、あるいはご質問とかありましたら、何でも構いませんので言っていただければと思います。よろしいですか。

それでは、事務局の方からその他ということで次回の日程等についてお知らせいただければと思います。

○事務局（庄子課長）

次回の日程でございますが、ちょっと事前に皆さまにもいろいろとお伺いしたところなのですが、ちょっと調整が必要なところがありましたようでしたので、委員長とも相談の上ご連絡させていただきたいと思います。3月の下旬になる予定です。最下旬になると思います。

それから、委員長からもお話しいただきましたが、追加のご意見がある場合には事務局宛てに、メールでもファクスでも何でも大丈夫でございますので、送付していただければ次回の議題までに整理をしておきたいと思います。

○野家委員長

ありがとうございました。それではあっという間に2時間過ぎてしまいました。貴重な意見交換ができましたこと、大変嬉しく思っております。

それでは、2回以降に向けてそれぞれの皆さま方に準備を整えていただくということにして、第1回目の中心部震災メモリアル拠点検討委員会、これで閉会とさせていただきます。ありがとうございました。